

比布利也未比(日震病)の薬方(中)

夏井 高人

『大同類聚方卷二十三』には「比布利也未比(ひふりやまひ)」の薬方が記録されている。そこに記載されている薬方については、既に「比布利也未比(日震病)の薬方(上)」らん・ゆり部会ニュース439号(2014年4月号)6~53頁で述べたとおりだ。

その中で、「丹波薬(タニハ薬)」と推定される薬方にある「古万久佐(コマクサ)」と「波耶之薬(ハヤシ薬)」にある「故万九差(コマクサ)」がどのような薬草を指すのかについては、不明としか言い様がない。これらの記述は、「コマクサ」と読めるのだが、「ゴマクサ」とも読解し得る。ところが、『大同類聚方』の用薬部には「コマクサ」の記載がなく、処方部の中にその名が散見されるのみなので、植物の同定に関して疑問が生ずることになる。

この「古万久佐」と「故万九差」に関しては、「比布利也未比(日震病)の薬方(上)」の原稿執筆時点では、十分に資料収集ができておらず、考察も不十分だった。

そこで、「古万久佐」と「故万九差」の解釈については、節を改め、440号で「続き」述べることにした。しかしながら、筆者の本務が多忙となったためその原稿を完成することができなくなり、440号で続編を掲載することは見送ることにした。

現時点においても更に検討すべき事柄が山積しており、原稿の完成に至ることができないでいる。けれども、少なくとも現在の和名で「コマクサ」と呼ばれている植物(*Dicentra peregrina* (Rudolph) Makino)が「古万久佐」と「故万九差」に該当する可能性は低いと判断するに至ったので、この点に限定した検討結果を本号の誌上で公表することにする。残りの部分は、更に吟味を重ねた上で、「比布利也未比(日震病)の薬方(下)」として後日公表したいと思う。

3 コマクサの検討

3.1 コマクサ(*Dicentra peregrina*)

通説は、「古万久佐」と「故万九差」の意義について、これを「コマクサ」と読み、ケマンソウ科コマクサ属の高山植物として広く知られているコマクサ (*Dicentra peregrina*) だと解している¹。このコマクサ (*Dicentra peregrina*) の植物分類上の位置づけに関しては、若干の注意を要する。つまり、ケマンソウ科 (Fumariaceae) をケシ科 (Papaveraceae) に含めて考える見解もある (従来を通説)。この見解に基づくときは、コマクサ (*Dicentra peregrina*) は、ケシ科コマクサ属の植物として扱われることになる²。また、日本のコマクサを日本固有種とし、カラフトコマクサ (*Dicentra peregrina*) の変種 (*Dicentra peregrina* var. *pusilla*) として理解する見解もある (ただし、現在では同種とする見解が通説となっている。) ³。コマクサの植物体には数種のアロカロイドを含むことが知られている⁴。

「コマクサ (駒草)」との名は、その花の形が馬の顔に似ているからだとするのが通説だ。しかし、全く同じ形の花を咲かせるケマンソウ (*Dicentra spectabilis*) の名は、仏教寺院を装飾 (荘厳) するための金属製の飾りである「華鬘 (けまん)」に由来するとされている。ケマンソウの名の由来に関する通説的な理解が正しいとすれば、そして、「駒草」が古代から知られていた植物だったとすれば、コマクサ (*Dicentra peregrina*) も「駒草」ではなく「華鬘草」であり、ただ、古代における廃仏毀釈等の政治的・宗教的な動乱を経て、「駒草」と名を変えてしまったと解する余地はある。とりわけ、神社においてコマクサ (*Dicentra peregrina*) を取り扱う場合、神仏混淆が許されない時代には、仏教寺院を連想させる「華鬘草」との名を用いることはできなかつただろうと推定される⁵。そのため、結局、「駒草」となつたと考えると、花の形

が馬の顔に似ていることを理由とする説は、正当ではないということになりそうだ⁶。

日本国の江戸時代以前の本草書中にはコマクサ (*Dicentra peregrina*) の記述がほとんど見当たらないが、例外的存在として、水谷豊文『木曾採薬記 (上巻)』(文化7年・1810年)がある。

『木曾採薬記 (上巻)』の「十日夕五ツ半時頃、黒沢村ヲ発シテ若宮へ詣、社地扁柏・羅漢柏ノ大樹大社ナリ。田中、トチ山、羽入屋敷ヲ経テ赤岩橋ヲ越シ是ヨリ御嶽へ上ル。サルバナ峠、マサゴヤ、千本松原、中小屋湯屋此辺ニテ日出十一日ナリ、ヤケ野、ハヒ松、赤岩、平岩ヨリ御嶽絶頂へ上リ、御嶽大権現へ詣、王滝村ノ方へ下る」との文で始まる段には、絶頂(頂上)付近で観察した多種の高山植物と並んで「絶頂ニ近キ所ニアリ、此草御嶽へ登ル者ハ御嶽山ノ御駒草トテ皆採リ帰ル、因テ採リ尽シテ今甚稀ナリ。高二三寸ニシテ一ヨリ二三葉ヲ生ジ、細葉ノ竹葉ニ似テ、莖葉俱ニ白色ヲ帯ビ、別ニ一莖ヲ抽テ二三花下垂ス、形ケマン草ノ花ニ似テ紅色、太サ五六分、根ハ髭根ニシテ黄褐色、荷包牡丹(ケマンサウ)ノ一種ナリ」との記述がある⁷。これは、自生地及び生態に関する詳細な記述があるものとして極めて重要な文献だと考える⁸。文化7年当時、木曾御岳山の頂上付近には、桃色花のコマクサがあったことを知ることができる。反面、白色花のものは存在しなかった可能性が高いことを知ることができる。そして、文化7年当時には既に濫獲により個体数が激減し希少なものとなっていたことを窺知することができる⁹。加えて、朝比奈秦彦「駒草ノ成分(東京醫科大學薬学科生薬学教室報告)」薬学雑誌 328号(1909) 626頁によれば、「本州中部及北部ノ高山ニ自生シ信州木曾御嶽ニ於テハ殆ド其ノ跡ヲ絶チ」とあるので、20世紀に入るところには絶滅してしまったと推定される。現在、木曾御嶽山にあるものはその後の植栽によるもので、現時点では適正ではないものとして抜去すべきものが多数含まれている可能性がある¹⁰。

江戸時代に描かれたコマクサ (*Dicentra peregrina*) の図版とし

ては、前田利保¹¹が編纂した『袖珍鑑』（嘉永6年・1853年）¹²がある。『袖珍鑑』の図版冒頭にある「立山駒草」の図がそれで、「立山駒草」との名前がある。図は極めて精密で、学術上の価値が極めて高い。その名前記載と富山藩の領土範囲から推定して、嘉永6年（1853年）当時、飛騨山脈（北アルプス）北部の立山連峰付近に所在する高山のどこかにコマクサ（*Dicentra peregrina*）が自生していたものと思われる¹³。

小野蘭山『本草綱目啓蒙』の卷之八には、「コマクサ」はないが、「ゴマグサ」がある。しかし、この「ゴマグサ」は、生薬「玄参」の異名として記載されているもので、生薬「玄参」とはゴマノハグサ科の草本ゴマノハグサの類の根を乾燥したものとされていること。そのことから、『本草綱目啓蒙』にある「ゴマグサ」は、コマクサ（*Dicentra peregrina*）を意味するものではない。おそらく、江戸のような低地・暖地でコマクサ（*Dicentra peregrina*）のような高山植物の実物を入手することは不可能または著しく困難だったことによるものだろうと推定される¹⁴。

3. 2 「コマクサ」と読むことのできる植物

江戸時代の諸国産物調の中には「コマクサ」と読める植物の記録がある。それらの中には現代の和名・学名を推定しようのないものもあるけれども、一応の推定が可能なものもある。何分にも文字情報のみなので正確な同定はできないが、若干の比較検討を試みたが、結論として、いずれもコマクサ（*Dicentra peregrina*）を示すものではないと思われる。

『陸奥国仙台領磐井郡東山築館村、天狗田村産物書上帳』（享保20年・1735年）¹⁵には、「こまくさ」との名がある。名前だけなので、それがコマクサ（*Dicentra peregrina*）と同じ種に属する植物かどうかを判別することができない。なお、磐井郡東山築館村と同郡東山天狗田村は現在の岩手県一関市東部にあった東磐井

郡に存在した村（当時は伊達藩の領土内）なのだが、その周辺にはコマクサ (*Dicentra peregrina*) が自生可能な高山は全く存在しない。近隣にある高山としては栗駒山（標高 1626 メートル）があるけれども、コマクサが自生できるほどの高山ではない。更に南方にある蔵王連峰の熊野岳（標高 1841 メートル）にはコマクサの自生がある。

『信濃高遠領産物帳』（享保 20 年・1735 年）¹⁶には、「ごまぐさ」との名があり、元は図面が付属していたらしい。現在では図面の所在が分からなくなってしまったので、判別することができない。

『長門産物名寄』（元文 2 年・1737 年）¹⁷には、「薺萇」の異名として「コマガラクサ」及び「コマクサ」が記載されている。「薺萇」には「ヒキオコシ」とのルビがふられている。シソ科ヤマハッカ属のヒキオコシ (*Isodon japonicus*) の名の由来は必ずしも明らかではなく、一般的には、気絶した人などを覚醒させ起こす効能のある薬草という意味だと解されている。しかし、「ヒキ」は馬を意味するから、馬の神経を高揚させる薬効のある草ということでヒキオコシとの名があるのだろう。そこから転じて「コマクサ」との名もあったのかもしれない。古代においては軍馬と関連する薬草名がかなり多数あるのだが、長い年月を経て、その本来の由来が忘れられてしまった可能性が高い¹⁸。なお、「薺萇」は、シソ科イヌコウジュ属 (*Mosla*) またはシソ科ナギナタコウジュ属 (*Elsholtzia*) に属する植物の誤りかもしれない。いずれにしても、コマクサ (*Dicentra peregrina*) ではない。

『玖珂熊毛郡産物名寄帳』（元文 4 年・1739 年）には「こま草」との名前の記載がある¹⁹。名前だけなので同定はできないのだが、一応の推測としては、同じ周防国の産物調帳である前掲『長門産物名寄』と同じように理解して差支えないのではないかと思う。

『舟木産物名寄帳』（元文 4 年・1739 年）²⁰には「こ米草」との記載があり、「こまくさ」と読めないこともない。ただ、名前だけ

なので同定ができない。ただ、「舟木」は周防国の中にあるので、前記の『長門産物名寄』及び『玖珂熊毛郡産物名寄帳』と同様に推測することは可能かもしれない。

『越前国福井領産物』（元文元年・1736年）²¹には「こまこま草」とあり、『越前国之内御領増地産物』（元文元年ころ）²²にも「こまこま草」とある。前者は名前の記載のみ。しかし、後者には解説がある。意識すると、「山野一面に春生ず。長さ五寸ほど。葉の長さ二寸ほど。七月に花が咲き、八月に結実する。一説によれば、本草綱目に云うところの鴨跖草とも」となる。前者の「こまこま草」と後者の「こまこま草」とが同一種であるとの保障は全くなく、鴨跖草に該当するツユクサ (*Commelina communis*) でもなさそうなので、その種名を確定することはできないが、明らかに、コマクサ (*Dicentra peregrina*) ではない。

以上のほかには「こまくさ」と読める植物の名は見当たらない。

3. 3 植生・分布からの考察

コマクサ (*Dicentra peregrina*) は、高山のガレ場のような特殊な環境条件下にある場所に生育する植物で、『大同類聚方』が編纂された当時に普通の者が簡単に登山でき、採取品を意味のある分量だけ搬出することができるようなところには生えていない。また、日本においてコマクサ (*Dicentra peregrina*) として認識されている植物は、おそらく氷河期の残存植物だと考えられる。そして、コマクサ (*Dicentra peregrina*) は、本州中部以北の寒帯に属する高山（岩手山，秋田駒ヶ岳，蔵王山，刈田岳，甲斐駒ヶ岳，白馬岳，乗鞍岳，八ヶ岳，水晶岳，清水岳など），北海道（大雪山周辺，雌阿寒岳，知床半島），樺太（南部の高山），千島（国後島の高山，択捉島の高山），カムチャツカ半島，シベリア東部（ハバロフスク，マガダン，沿海州）に分布している²³。中国，朝鮮，台湾には全く分布していない²⁴。

ところが、『大同類聚方』の薬方に記述されている草本は、いずれも低地～低山に生育するものばかりで、そもそも高山植物に含まれる植物は念頭に置かれていなかった。そして、当時の中国においても高山植物を基原とする生薬の処方は存在しなかったと考えられる。『大同類聚方』に収録されている薬草で中国大陸から渡来したと推定されるものの多くは、当時の中国諸王朝の都があった洛陽周辺～山東半島あたりに自生する植物が基本となっている。例外的に西域の砂漠地帯に自生する植物もあるが、それは西域諸国から中国諸王朝の皇帝に献上されたものなどの子孫だったかもしれない。したがって、日本の植生では高山植物に属する植物を中国大陸から輸入することもなかっただろうと推定される。

加えて、縄文時代～古墳時代ころには、現在よりも気温が高く、海水面がずっと高かったと推定されることも考慮に入れるべきだと考える。氷河期の残存植物である寒帯の植物は、温暖化した時期には分布域を現在よりもずっと北のほうまで後退させており、その後、14世紀～19世紀にかけて小氷期と呼ばれる大規模な寒冷化が進んだ結果、寒帯に属する植物の分布域が南下して現在ある植生分布に近い状態になったのではないかと推定される。要するに、『大同類聚方』が編纂された当時のコマクサ (*Dicentra peregrina*) の分布域南限は、現在よりもずっと緯度の高い位置にあったと考えるのが妥当だ。

これらコマクサ (*Dicentra peregrina*) の植生や分布などを考えると、結局、『大同類聚方』にある「古万久佐」と「故万九差」がコマクサ (*Dicentra peregrina*) だと推定することは極めて難しいのではないかと思う。

(続く)

[注記]

¹ 前掲『全訳精解大同類聚方[下]処方部』117頁

² コマクサを含め、ケマンソウ及びその近縁種の分類については、福原達人「ケマンソウ亜科の系統学的研究—種子・果実の比較解剖と分岐分析」(京都大学, 1996)が詳しい。

³ 牧野富太郎『原色日本高山植物図譜』(誠文堂新光社, 1953)第46図版

⁴ 小西天二・小西一豪・竹村照美・松田明姫・木島孝夫・清澤 脩「コマクサ培養組織のアルカロイド成分について」生薬学雑誌 52 卷 1 号 (1998) 47～53 頁

⁵ 「駒」は、馬頭観音を連想させる。梵名のハヤグリーヴァ(何耶掲梨婆)は、「馬の首」を意味し、ヒンヅー教の最高神であるビシュヌ神の化身とされる。古代の大王はまさにビシュヌ神的な最高神として君臨し、貴金属でつくられた装飾品で荘厳した軍馬に騎乗してその支配地を巡行していたのかもしれない。「馬頭観音」は、密教では「馬頭明王」と呼ばれ、神道の保食神、駒形神、蒼前神等と習合するものとされる。保食神を祀る神社は、古代において軍馬の産地だったと推定される常陸国～武蔵国に比較的多く、その周辺には軍馬にちなむ地名、神社、関連遺跡(古墳など)が多数ある。また、駒形神、蒼前神を祀る神社は陸奥国に比較的多いのだが、ここでもまた古代～現代に至るまで軍馬の産地として知られているところが多い。古くはその創建を坂上田村麻呂ころまで遡ることのできる神社があるから(主として旧南部藩領内)、坂上田村麻呂による蝦夷攻略の時代ころから軍馬の産地としての統治が始まるものとも考えられる。なお、「蝦夷」がどのような人々を指したのかについては諸説あり、はっきりしない。私見としては、天孫降臨と国譲り前後の時期(中国大陸では魏晋南北朝の時代に相当)の古代豪族の子孫だった可能性があると考えている。「蝦夷」との名は、蛭子神(恵比寿神)などの神を信仰の対象とする人々だったということから付された名前なのではないかとも考えられる。

⁶ 池原昭治『日本の民話 300—旅先で聞いた昔話と伝説』(木馬書館, 1993) 243 頁には「御嶽山のコマクサ」と題する説話が収録されている。これによれば、信州の小諸付近の小さな村に「おこま」という娘がおり、病気になった際、おこまの母親が木曾御嶽神社で病気回復を祈願し続けたところ、夢の中で、御岳山の頂上にある「桃色の花が咲

く小草がある。娘の病気には、その草をとってきて飲ませよ」とのお告げがあり、そのとおりにしたところ、おこまの病気が全快したので、おこまの名をとって「オコマグサ」と名付けられ、後にこれが「コマクサ」となったとの伝承があるそうだ。このような伝承が本当に存在したのかどうかを確認することはできないが、仮に存在していたとしても、コマクサを薬草として販売促進するための創作説話だった可能性があり、仮にそうだとした場合、この説話の成立時期は明治時代以降だったのではないかと推定される。なぜならば、江戸時代以前に編纂された本草書等においてこの説話を反映したと推定可能な記述のあるものは、少なくとも現存する文献中にはただの1つも存在しないからだ。

⁷ 名古屋市教育委員会『名古屋叢書第13巻科学編』愛知県郷土資料刊行会 266～268頁

⁸ 根について「根ハ髭根ニシテ黄褐色」とあるので、あまり深く掘り下げて観察しなかった可能性が高い。逆から言えば、当時、コマクサ (*Dicentra peregrina*) の根についてはあまり興味をもつことがなく、その部位を薬草としては利用していなかった可能性があることを示唆しているといえることができる。

⁹ 木曾御嶽山のコマクサ (*Dicentra peregrina*) が自生・野生種だったと仮定しても、約5000年前の大噴火に伴う火砕流により全山で完全絶滅が発生していたと考えられるから、どんなに古くても約5000年前から自生していたものだったと推定することができる。また、木曾御嶽山の登山道が開設され比較的容易に登山できるようになったのは、天明5年(1785年)に尾張春日井郡出身の覚明行者が信仰目的での登山のために黒沢口からの登山道を開いて以降のこととされている。『木曾採薬記』が編纂されたのは文化7年(1810年)なので、わずか数十年の間に絶滅寸前の状態までコマクサ (*Dicentra peregrina*) の個体数が激減したことになると推定せざるを得ない。そして、薬草としての「駒草」が日本国内で広く知られるようになったのはこの時期以降のことなのではないかと考えられる。

¹⁰ ラン科植物に限定されるものだが、IUCN ラン部会日本委員会「ランの植え戻しのガイドライン」では「地域集団(個体群)は、個々に異なる歴史背景をもち、遺伝的分化を遂げつつあります。他地域の植物・系統を植え戻すことは集団本来の姿を損なうこととなり、自然環境の保全とそう反する行為となります。従って、園芸的観点から選別された個体である園芸品種や由来の不明な植物を植え戻すことは絶対に避けなければなりません」としている。白山では過去にコマクサ (*Dicentra peregrina*) が自生した記録がなく、DNA解析の結果、乗鞍

岳のコマクサ及び市販品のコマクサと一致したことから、全部植栽されたものとの判定がなされ、その結果、中部地方環境事務所により全部除去すべきものとする決定がなされた。加えて、日光自然環境事務所「日光白根山に生育しているコマクサの DNA 分析結果について」によれば、日光白根山においてコマクサとされてきた植物には蔵王山のコマクサ (*Dicentra peregrina*)、草津白根山のコマクサ (*Dicentra peregrina*) 及び由来不明の園芸品種などが含まれていることが判明している。修験道の行者による古い時代の植栽を考えるよりも、比較的最近の時代における移入を推定するのが合理的だと考える。最終的には、白山と同様の処置が必要になるのではないかと思われる（もっとも、環境省の立場と農林水産省の立場とでは、極端に異なっているようにも思える。このことが、自然保護に関して「一貫性のない行政」といったような事態を発生させていることは否定しようがない。）。他方、長野県環境保全研究所「長野県生物多様性概況報告書」(2011) 54 頁では、園芸品コマクサの移入と外来昆虫との関係で、遺伝子汚染の可能性が指摘されている。

¹¹ 前田利保は、富山藩第 10 代藩主で、隠居後、本草の研究に打ち込み、『本草通串』などの優れた本草書を著した。

¹² 高山植物の図版のある江戸時代唯一の書籍だとされている。富山県立図書館のサイトでそのカラー写真を閲読することができる。

<http://www.lib.pref.toyama.jp/gallery/collection/intro.aspx?isnvmngcd=1:1306>

¹³ 五龍嶽（標高 2814 メートル）を含む後立山連峰の稜線には現在でもコマクサ (*Dicentra peregrina*) が自生している。

¹⁴ 現在「コマクサ」との名を付して山野草店などで販売されている植物苗の大半は、外国産近縁種との人工交配により低地・暖地でも栽培可能なように育成された園芸品種だと考えられる。野生の日本のコマクサ (*Dicentra peregrina*) を低地・暖地で栽培することは、基本的に不可能または極めて困難なことに属する。なお、コマクサ (*Dicentra peregrina*) 及びその近縁種（米国産のアメリカコマクサ (*Dicentra eximia*)、台湾産のヒメケマンソウ (*Dicentra formosa*) など）の交配品としては、赤色花品ではラクジュリアント (*Dicentra* 'Luxuriant' (*Dicentra eximia* × *Dicentra peregrina*)), 桃色花品ではキャンディハート (*Dicentra* 'Candy Hearts' (*Dicentra eximia* × *Dicentra peregrina*)), グーテンベルグ (*Dicentra* 'Gothenburg' (*Dicentra formosa* subsp. *Oregana* × *Dicentra peregrina* forma *alba*)), キングオブハーツ (*Dicentra* 'King of Hearts' (*Dicentra peregrina* × (*Dicentra formosa* subsp. *oregana* × *Dicentra eximia*))), ツネシゲロクジョウ (*Dicentra* 'Tsuneshige Rokujo' (*Dicentra nevadensis* × *Dicentra peregrina*)), 白花品ではアイボリーハーツ

(*Dicentra 'Ivory Hearts'* (*Dicentra eximia* × *Dicentra peregrina*)) などがあ
る。これらの品種を含め、草津白根山及び大雪山で採取された野生種
との品種特性の比較検討をした調査結果として、独立行政法人種苗管
理センター「平成 11 年度種苗特性分類調査報告書・こまくさ」(平成
14 年 3 月)がある。

¹⁵ 盛永俊太郎・安田 健編『享保元文諸国産物帳集成第 XVIII 卷』(科
学書院, 1993) 513 頁

¹⁶ 盛永俊太郎・安田 健編『享保元文諸国産物帳集成第 III 卷』(科学
書院, 1986) 206 頁

¹⁷ 盛永俊太郎・安田 健編『享保元文諸国産物帳集成第 VIII 卷』(科学
書院, 1988) 411 頁

¹⁸ 日本の古代史について、騎馬民族侵略説を前提にすると、非常にわ
かりやすいことがある。もともと、海を越えて騎馬軍団がやってきた
とは考えにくい。そうは言っても、天孫降臨と国譲りのころ以前の日
本(倭国)にはもともと馬が1頭も存在しなかったので、ごく数頭の
馬でもかなり強力な戦力となっただろうと推定される。現代の兵器で
は戦車(タンク)に匹敵する。原古墳(福岡県うきは市吉井町富永宇
原)の石室壁画には馬を運搬する船を描いたものがある。

¹⁹ 「玖珂」とは奇妙な地名なのだが、『隋書』の「倭国伝」にある秦
王国があったとされる周芳国が周防国とほぼ同一地域に該当すると推
定されることから、「玖珂」とは「王である華夏」を示すものと考え
ることができる。秋吉台と秋芳洞のある「秋吉(秋芳)」も、元は
「周芳」またはこれに類する地名だったかもしれない。近隣の山口県
周南市には「太華」という地名が、山口県防府市には「華城」という
地名がそれぞれ残されており、山口県下関市には「華山」という山も
ある(防府市にある「桑山」も元は「華山」だった可能性がある。こ
の桑山には桑山八幡宮があり、応神天皇と神宮皇后を主祀神としてい
る。毎年5月には奴行列が奉納されるが、もしかすると古代の軍隊の
閲兵式の名残かもしれない。)。山口県は旧長州藩に該当する。長州藩
の名の由来は、長門国と周防国を合わせた地域を長門国の萩に城を構
える氏族が統治することになったという歴史的経緯から長門国の名だ
けを残すことになったのだとされている。しかし、古代においては、
周防国(周芳の秦王国)がかなり強大な軍勢力と独立性を有していた
だろうということを優に想像することができる。そして、古代の有力
豪族だった秦族は、麻の栽培や養蚕・機織りを教えたということであ
られている。おそらく、同じように麻を植えることを教えたとされる
忌部氏(齋部氏)や少彦名神と実質的に同一の氏族で、朝比奈氏や麻
生氏の祖だと考えられる。『日本書紀』によれば、秦氏は、応神天皇

14年に百済から120県の人々を率いて渡来し帰化した弓月君を祖とするとされている（「120県」が史実だとすれば、比較的大きな国がまるごと全部移動してきたのと同じ規模だったと推定できる。）。しかし、「百済」の解釈については、従来のように朝鮮半島にあったとされる百済国を示すものではなく、仏教徒（ヒンズー教徒）を示すものとして読むべきではないかと思う。また、「弓月」は、月読神にも通ずると考える。仮に「弓月君」と「月読神」とが同一の者または氏族だったとする場合、秦氏の氏族内でも大国主の国譲りのような禅譲（氏族支配権の変更）が行われた可能性を検討しなければならないだろう（雄略天皇の時代における秦酒公の事跡がそれに該当するかもしれない。）。なお、『海部氏系図』によれば、秦氏を含め、古代の有力氏族の大半が古代の海部氏と何らかの血縁関係を有していたことになる。このような考え方については、「比布利也未比（日震病）の薬方（上）」らん・ゆり 439号6～53頁の中で既に述べた。

²⁰ 盛永俊太郎・安田 健編『享保元文諸国産物帳集成第X巻』（科学書院, 1985）79頁

²¹ 盛永俊太郎・安田 健編『享保元文諸国産物帳集成第I巻』（科学書院, 1985）490頁

²² 前掲『享保元文諸国産物帳集成第I巻』532頁

²³ 清水建美『山溪ハンディ図鑑8 高山に咲く花』（山と溪谷社, 2002）297頁, 大場達之・高橋秀夫『日本アルプス植物図鑑』（八坂書房, 1999）11頁, 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫編『日本の野生植物II 草本離弁花類』（平凡社, 1982）123頁, 北村四郎・村田 源『原色日本植物図鑑草本編II 離弁花類』（保育社, 1961）189頁, 武田久吉『原色日本高山植物図鑑[増訂版]』（保育社, 1963）51頁, 館脇 操「コマクサの分布と生態」植物生態学会報1巻1号（1951）17～21頁

²⁴ アメリカ合衆国カリフォルニア州（西部にある山岳地帯）とオレゴン州（カリフォルニア州との州境付近にある山岳地帯）に自生するとの報告がある（Flora of North America Editorial Committee (ed.), Flora of North America North of Mexico vol.1, Oxford University Press, 1993）。これによれば、標高1200～2700メートルの火山岩・花崗岩地帯に自生することとで、米国ロッキー山脈の一部を構成する山岳地帯がその自生地だと理解することができる。ただし、その生育状況等の詳細はよくわからない。誤認の可能性も含め、詳細な検討が望まれる。